

<ポスト><ウィズ>コロナ社会に関する日本英文学会的考察

原田範行

私たちは今、コロナ禍にあって、なかなか先を見通せない<切迫した今>を生きている。現在のこの危機的状況が、一人一人の生き方はもちろん、人間社会のあり方、さらには地球環境にも及ぶ大きな変化をもたらすであろうということを、私たちは、日々の生活において、また教育研究の場において実感し、さまざまな対策を検討している。率直にそういうことを語り合い、日常的・具体的レベルから中・長期的な視点に至るまで、先を見通せないながらも、諸種の方向性や可能性を考えておくことは、まさに<切迫した今>を生きる私たちの学術的活動に資するのではないか。予測めいたことには限界があるが、明日を考えることで今日を生きる知恵を、文学、言語、教育、文化に携わる会員同士で共有し、共有することで、よりよい知恵にしていきたい。本発表の目的は、そのための予備的な見取り図を示すことにある。

<ポスト><ウィズ>コロナ社会を考える上で、まず留意すべきことは、次の三つの問題がいささか錯綜しているということである。第一に、ウィルスにかかわる具体的な問題や知見、第二に、社会的動向や経済活動の問題、そして第三に、このコロナ禍で顕在化した、しかし従来から既に進行しつつあったデジタル化や AI の発達と社会変容の問題、である。この中において、特に人文学の教育研究からみて奇妙なのは、主に第一の問題についてのみ専門的知見が求められているということ、逆に言えば、ペストの歴史についての考察も、テクノロジーと人間との言語文化的考察も、いささか等閑に付された感がある、ということである。今回のようなテーマを日本英文学会において取り上げる理由の一つは、<切迫した今>と今後を考えるための学術的試みの中で、広く人文学の知見を生かした政治的・社会的動向が、目下のところ必ずしも明確ではない、それゆえ、私たちの有する知見が、しかるべき形で社会に生かされる機会を失うのではないか、という危機感である。もちろん、言語・文学の研究、文化論、教育論などの成果は短期的な尺度で測れるものではない。ただ、そうではあるにせよ、私たちの視点や知見によって、日本および世界の人間社会に能動的に関与していくことは求められよう。新型ウィルスの性質についての情報を収集してワクチンの有効性などを検証することと、人間社会や文化のあり方をトータルに考えることとは、根本的に性質が異なることは言うまでもないが、少なくともその違いについて、人文学の立場から一定の発信をすることは必要である。危機の時代にあつてしかるべき人間社会を構築するという問題は、まさに<切迫した今>を生きる私たちの人文学的課題でもあるからだ。

このような点を確認した上で、できるだけ身近な問題から考察を始めてみたい。それはたしかに身近ではあるが、しかし同時に、その身近さ、あるいは素朴な生命感覚や判断基準の内にこそ、言語文化を基盤とする人文学的知見のエッセンスと包括性、総合性が宿っているのではないかという期待を込めて、である。

日本英文学会は、92 回大会以降、94 回大会に至るまで、オンライン形式での開催を余儀なくされ、対面による研究交流の機会や効果は著しく削がれることになった。もちろん、海外在住の会員などの大会参加が容易になり、また日程を柔軟に考えられるようになった。ただ注意しなければならないのは、対面による研究交流効果の低減は、一般的なメリット、デメリットの議論よりも、より複雑で本質的な問題を有しているという点である。顔の下半分を隠したマスク社会は、音声学のような学問はもちろんのこと、表情を読む、口元をさぐる、あるいは内緒話をするといった人間の文化そのものにも影響を与えるであろう。また、人やモノの移動が減るということは、私たちの生物学的感覚に影響するばかりでなく、そうした移動を前提に構築されてきた社会基盤や文化形態にも変容を迫ることになる。各種の輸送手段とそれを基盤とする住宅や町、都市のあり方、あるいは学校の設置基準等が見直されるとすれば、それは私たちの日常生活から家族のあり方、さらには、これまでグローバル化と呼んできたもろもろの動向にも深くかかわってくる。インフラストラクチャは、それ自体が堅固なモノであり、それに投資して利益を生む経済構造が容易に変化しえないことを考えると、場合によっては巨大な廃墟が続々と生まれてくるかもしれない。さらに、学会にとっていっそう深刻だと思われるのは、インターネットを利用したオンライン配信を中心とすることで、研究交流と切磋琢磨を主眼とする学会の実態が希薄化するのではないか、ということがある。もちろん、ネット配信によって研究成果が広く社会に知られることはプラスである。ネットという情報媒体では、信頼できない情報と長年の研究成果とが同じ場所に、さしたる差異や階層もなく並んでしまうのだから、それはそれで深刻な問題をはらんではいないが、それも、印刷出版文化が著しく進んだ近代初期の識字率の上昇のようなことを想起するならば、情報リテラシーの向上によってある程度まで克服できよう。ただ問題なのは、まさに印刷出版文化がそうであったように、インターネットによる情報発信は情報の消費に力点があり、思想や想像力を練り上げる思索や思考、クリエイティブな生産的プロセスには、特にその教育には、必ずしも効果的ではないという点である。印刷出版文化の場合、そのコ

ンテンツが生み出される過程には、まず人間同士の対話や談論、接触があり、学校もあり、またその中であって人知れず作品執筆に専念する作家たちの創作工房などが豊かに共存していた。しかし、対面による多様なコミュニケーション機能の低減した社会にあっては、正しい情報もニセ情報も、たんなる思いつきも、長年の研究成果も、差異化、階層化がほとんど取り払われた形で視聴者の消費に提供されることになる。多様な要素をもつ対面のコミュニケーションと、オンライン通信という媒体とが、はたして対等になりえるのか。学会が、研究成果の発表の場であるとともに、さまざまなレベルでのいわば立ち話を重要な研究交流の場とするものであったとすれば、この立ち話の機能、すなわち、クリエイティブな研究成果を生み出す駆動力のような機能が、非対面開催によって損なわれかねないということを、学会は、そして広く人間社会は覚悟する必要がある

研究交流効果の低減のほかにも、<ポスト><ウィズ>コロナ社会において、日本英文学会が考えておくべきことは少なくない。コロナ禍は、自動翻訳を含む AI 技術の実用化にいちだんと拍車をかけたが、AI や自動翻訳の課題を、一方では技術の進歩とともに、他方では、言語・文学の教育研究が果たすべき役割を明確にしつつ、説明する必要がある。また、教育研究に活用するための各種データベース等の構築が世界的に進展する中であって、こうしたデータベースの構築を、商業的な企画のみに委ねるのではなく、学会としての知見を積極的に活用していくことも強く求められるのではないかと。日本英文学会に期待される主導的役割は大きい。

最後に、サイバースペースの拡大・日常化に伴って、私たちの生活感覚、あるいは日常性の概念そのものも変化し、それが、私たちの学術的常識にも変容を迫るのではないかと、ということを描きおきたい。これは、学会のオンライン開催に伴う対面的研究交流効果の低減とも関係しているのだが、より広く、人間社会そのものの変容ということでもある。時間意識や空間認識のありようも変わってこよう。居住地域のコミュニティとは別のコミュニティのあり方が文化研究のテーマになるとか、ネット上を往来する国籍不明の登場人物が、対面的人間関係と並列的に存在するような小説が描かれるとか、そういう事態が現実のものとなりつつある。言語表現自体も変わってこよう。大文字の I が小文字化したり、句読法が消えたり、スペリングが簡略化するなどの現象は既に見られるが、例えば、町といい村といい、叢といい空き地といい、私たちはそこに何らかの実体的な場を想定して言葉を発し文章を綴っているのだが、そういう実体性が軽くなって、空間表象に変化が生じるのではないかと。ヴァーチャル・リアリティが一般化すれば、奥行きを持った実体が恐怖となるようなことさえ考えられる。どこそこまで出かける、という行動が AI に管理されるようになれば、地図によって養われてきた空間的認識が弱まるとともに、無駄な時間を過ごす、寄り道をするとする行動様式が忘れられてしまうかもしれない。人生の道草という表現は、その意味や効用を失って理解不能となる—コロナ禍によって、既に以前から見られた私たちの日常性の変容に著しく拍車がかかることを、私たちは視野に収めておく必要がある。

そのような<ポスト><ウィズ>コロナ社会にあって、人文系の教育研究は、どのような指針や方向性を持つべきなのか。かつて、18 世紀イギリスの文豪サミュエル・ジョンソンは、シェイクスピアのいわゆる三一一致の法則への違反をむしろ弁護して、次のように述べている。

最初の一時間はアレクサンドリアで過ぎ、次の一時間はローマで過ぎるなどということがあり得ないとする批判は、つまり、その劇が始まる際、観客はみな本当にアレクサンドリアにいたいと思ひ、劇場への道のりは、すなわちエジプトへ航海するようなもので、誰もがアントニーとクレオパトラの時代に生きていて考えている、ということをも前提にしている。だが、そんな想像が働くならば、その想像はさらに進むはずだ。劇場の舞台がプトレマイオスの宮殿だと思える人ならば、30 分ほどしてそれがアクティウムの岬だとすることもできよう。(略) 実際のところ、観客は常にそれなりの感覚 (senses) を持っていて、芝居の第 1 幕から最終に至るまで、舞台は舞台だし、役者は役者に過ぎないということをも心得ているのである。

(Samuel Johnson, *Johnson on Shakespeare*, ed. Arthur Sherbo, Yale Edition 7 (New Haven: Yale UP, 1968), pp. 76-77 より拙訳)

さまざまな災禍は、実際のところ、過去に類例がないわけではない。しかし人間は、記憶や歴史の忘却という、これもまた人間的な性質によってその教訓や知見を失い、再びその災禍に見舞われる。今回の場合、人間はそこに、新しいワクチンとともに、社会的機能を有したサイバースペースを構築してその実用化を一気に進めた。そのサイバースペースは、ひょっとすると記憶や歴史の忘却を補うことにもなるだろうが、しかしそれは同時に、人間そのものの生物的特質や社会のあり方に変容を迫ることにもつながるものであろう。その時、私たちに何ができるのか。ジョンソンが先の引用で senses と呼んだものは、想像力とも、また想像力を統御する力とも、あるいはまた、常識的な身体感覚・生物的感觉とも解釈できようが、そういう力を教育研究の場で発揮し、その重要性を<切迫した今>の人間社会に示し続けること—これが、この問いに対する当面の答えである。